

ヴァリニャーノの『日本のカテキズモ』に見られる 迷信行為と悪魔的契約の意義について

メナチェ・ダリオ・アンドレス

はじめに

日本における布教活動は1549年にイエズス会士のフランシスコ・ザビエル(1506–1552年)の来日を通して始まった。彼の後を継いだコスメ・デ・トレス(1510–1570年)やガスパル・ヴィレラ(1525–1572年)、ルイス・フロイス(1532–1597年)らの努力の結果として、日本キリスト教界の規模は著しく拡大した。そして、日本におけるイエズス会の活動が始まって以来、抱えてきた課題に向き合い、取り組んだのは、東インド巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ(1539–1606年)である。ヴァリニャーノは説教活動にとって不可欠な存在であった同宿や日本人修道士たちがイエズス会士になるために、必要な教育を受けさせることに関して積極的であった。そのために、彼は巡察師として日本における教育施設の設立や出版技術を促進した。この文脈の中で、『日本のカテキズモ』(1586年)(以下『カテキズモ』)として知られている教理書が出版された。この書の中で、ヴァリニャーノは宣教師たちとともに説教に関わってきたヨーロッパ人と日本人を対象にキリスト教と仏教の要旨を述べた。

『カテキズモ』を分析の対象とした先行研究は豊富である。とりわけ、ヴァリニャーノの仏教論駁や彼の仏教理解、そして日本人の世界観・考え方に対する「適応」の方針という主題に主眼が置かれることが多い⁽¹⁾。一方、同書に見られる反迷信(anti-superstitions)思想的な枠組みや在来宗教の悪魔化といった主題を扱う研究は少ない。例えば、T. メイナード(Meynard)はこの思想的枠組みが『カテキズモ』に見られる仏教像を大いに形成したと主張しているものの、その思想の由来と特徴についてはほとんど論じていない⁽²⁾。対して、近年の研究として、ヨセフ・B. ムイベルガーは『カテキズモ』に確認されうる在来宗教を偶像崇拜と見なす批判や僧侶らに対する悪魔と契約を結んだということへの訴えがヴァリニャーノの救済論とキリスト教論とつながっていることを明らかにしている⁽³⁾。ところが、ヴァリ

ニャーノに見られるこの反迷信思想と悪魔的契約という概念がいかにキリスト教思想史に根付いたものであり、布教活動の歴史という大きな文脈の中に位置付けられるのかという問題点は、彼によって十分に追究されていないと思われる。後で述べるように、このような神学的・思想的枠組みは当時のヨーロッパやアメリカ大陸において宣教師らによって「異端」に対して行われた迫害と密接な関係を持っている。筆者はその関係を分析しつつ、次の問いに取り組みたい。『カテキズモ』に見られる悪魔的契約は具体的にいかなる意味を有していたのか。そして、ヴァリニャーノはいかなる意図でもって悪魔的契約という概念を僧侶らと結びつけたのか。これらに答えた上で、ヴァリニャーノによる在来宗教に対する立場を再考したい。以下では、ラテン語版の『カテキズモ』の第一巻第四講において在来宗教や僧侶らを批判する際に用いられた「悪魔的契約」という概念を分析することを通してこれらの問いに取り組みたい。

1. ヴァリニャーノの『日本のカテキズモ』について

本論の課題に取り込む前に『カテキズモ』はいかなる書物であるかを簡単に説明しておく必要がある。『カテキズモ』の正式な題目は『日本の諸宗派を論駁するキリスト教信仰のカテキズモ (Catechismus Christianae fidei, in quo veritas nostrae religionis ostenditur, et sectae Iaponenses Confutatur)』である。本題が示すように、この書は教理書としてよりも、日本修道士たちや神学生のために、日本宗教を論駁しつつ、論理的かつ神学的にキリスト教を解説するものとして作成されたものである⁽⁴⁾。本書は、ポルトガルリスボンで1586年に初めて発行された。もっとも、初版が印刷される以前に、ヴァリニャーノは既に、豊後(現在の大分県)の臼杵にあったノビシアド(修練院)でこの教科書の内容を教えたことがある⁽⁵⁾。この『カテキズモ』の本文はすべてラテン語で綴られており、二巻に分けられている。一巻目は八講(concio)で、二巻目は四講からなる。一方で、日本語で書かれた『カテキズモ』もまた存在している。けれども、この和訳は断片的でラテン語版の上巻の半分に満たない。今回の考察においては、仏教の諸宗派や神道に見られる「カミ Cami (神)」や「ホトケ Fotoque (仏)」の存在とその崇拝へとつながる恩恵と救済をめぐる議論がなされる第一巻第四講を参照する。というのも、この章の中でヴァリニャーノは「空虚な迷信」や「悪魔的契約」という概念をこれらの存在に対する信

仰と日本の僧侶らと結びつけるからである。

2. キリスト教における悪魔的契約と日本布教への伝来

先に言及したように、『カテキズモ』の第一巻第四講においてヴァリニャーノは、僧侶らと悪魔との契約について述べるのであるが、まず、この概念は反迷信的行為という思想といかなる関係を有するのであろうか。このことを理解するにあたっては、古代キリスト教の時代の神学まで遡って見る必要がある。アウグスティヌス(354–430年)は、『キリスト教教義について』*De Doctrina Christiana* (第一・二・三巻396–397年、及び第四巻426年)において、当時非キリスト教徒の間に実施されていた偶像礼拝、病の平癒や占いなどをキリスト教的な立場から考察したうえで、それらが空虚な迷信行為(*vana superstitio*)、すなわち人間の世界において効力がなく、神が認めた行為ではないものとして批判している。アウグスティヌスにおける「迷信」という概念を理解するにあたって、まず次の解釈を確認する必要がある。

偶像をこしらえ拝むために人間が築き上げたものは、すべて迷信的である。または神としてある被造物や被造物の一部を拝むこと、または魔術の努めにおけるように、悪霊たちと結ばれた、かつ協定されたしるしにかんする相談や契約も(そうである)⁽⁶⁾。

つまり、偶像崇拝は迷信的な行為として位置づけられている。そして、神の被造物を拝むことも同じく批判されている。後述のように、同じような批判は『カテキズモ』にも確認することができる。さらに、アウグスティヌスによれば、非キリスト教徒の人々がデウス以外に偶像に捧げ物を与えること、あるいは守りや占いに頼ることによって悪魔たちと共通の目的を有した共同体(*societas*)に関与することになるという⁽⁷⁾。その共同体の頂点に立つのはキリストの大敵たる悪魔(*diabolus*)であると言われている⁽⁸⁾。すなわち、アウグスティヌスの見解に即せば、迷信行為を行う者は悪魔の支配下にいるという。

中世に入ると、トマス・アクィナス(1225–1274年)においても、礼拝や崇拝に属さない種類の迷信行為として、アウグスティヌスが既に批判した迷信行為すべてが確認されうる。すなわち、偶像崇拝や占い、病気に薬効があるお守り、そして聖なる律法とは異なる掟の遵守という四つの迷信行為がある⁽⁹⁾。また、トマスは悪魔

的契約に関して「暗黙の契約 (tacita pacta)」という概念を付け加える。つまり、迷信行為を行う者は、たとえ悪霊たちの力を借りる意図がなかったとしても、必然的に悪魔と結びつけられることになるということである⁽¹⁰⁾。トマスは夢による预言を取り上げながら、明示的及び暗示的な契約における迷信について解釈する。その内容を要約して言えば、将来を予知すること自体はキリスト教に反する行為ではない。むしろ、旧約聖書の預言者たちに見られるような、神の啓示によるものであれば、それは迷信行為に相当しない。一方、そうでない予知は、明示的にせよあるいは暗示的にせよ、悪霊たちの「啓示 (revelatio)」によるものであり、迷信的なものとして捉えるべきであるとされる⁽¹¹⁾。

トマスの暗示的契約の論理は、とりわけ中世後期から発展を示した。例として、14 世紀末にパリ大学総長を務めたジャン・ジェルソン (1363–1429 年) が魔術に関する当時の神学者たちの思想を集めた『魔術の誤謬について』(De erroribus circa artem magicam 1402 年) という論文がある。同論文において、神や自然法以外に頼り、効果をもたらそうと思われるあらゆる迷信的行為は、必然的に悪魔との契約を生じさせるということが主張されている⁽¹²⁾。この見解は、15 世紀から始まった大規模な魔女狩りの土台となった、悪魔の使いとしての魔女像を形成したと考えられる⁽¹³⁾。また、スペインでは 15 世紀から反迷信文学が隆盛し、マルティン・デ・アズピリクエタ (1491–1586 年) をはじめ、一部の神学者の著作の中で上記の暗示的な契約の概念が頻繁に用いられ、さらに発展することとなったが⁽¹⁴⁾、同概念がアンデス山脈地域で在来宗教に対して行われた批判や攻撃に用いられたことが既に指摘されている⁽¹⁵⁾。

古代から中世にかけてキリスト教の神学者たちによって迷信行為と悪魔的な契約の関係は発展し、その見解はイエズス会の代表的な創立者たるイグナチオ・デ・ロヨラ (1491–1556 年) とザビエルの時代まで引き継がれた。彼らは現在のスペイン北西部にあるバスク地方で生まれ、パリ大学で神学を学んだ⁽¹⁶⁾。それゆえ、上記の偶像崇拜や迷信行為と悪魔的契約をめぐる神学的な議論に、ある程度の馴染みがあったと思われる。例として、ザビエルの書簡において日本の釈迦・阿弥陀信仰や僧侶らが悪魔と結びつけられていることが確認できる⁽¹⁷⁾。彼が日本布教活動のために教理書を記した記録はあるものの、その原本や写しは現存していない。しかし、彼の後を継いだ宣教師たちは仏教・神道批判を中心とした教理書を残しており⁽¹⁸⁾、

ヴァリニャーノは『カテキズモ』をまとめた際に、これらを参考にしたと考えられる⁽¹⁹⁾。それゆえ、イエズス会士の創立者たちに見られる反迷信的思想や悪魔像はヴァリニャーノらにまである程度受け継がれ、さらに発展がなされたことが推測されうだろう。このことを踏まえたうえで、以下では、『カテキズモ』の第一巻第四講の中で偶像崇拜・迷信行為・悪魔的契約の三点と在来宗教や僧侶らという両者の関連づけを確認したい。

3. 『カテキズモ』に見られる日本人の偶像崇拜の源と僧侶らの悪魔的契約

ヴァリニャーノが『カテキズモ』の中で悪魔について言及しているのは、第一巻第四講であり、この章で最初に問題となっているのは「カミ」と「ホトケ」に対する崇敬である。ヴァリニャーノはキリスト教の観点からすれば偶像崇拜にあたるこの行為に対して、批判を展開するのであるが、その論拠として挙げられるのは次のようなものである。(i)第一原理としてのデウスの唯一性に基づく「カミ」と「ホトケ」の存在の否定、(ii)「シャカ」と「アミダ」の人間性の指摘、(iii)人間の理解力・能力を超えるデウスによる世界の統治及び保持、(iv)「カミガミ」の存在の否定。ここで注目したいのは、これらに続く(v)死者だけではない生命・理性を欠いた存在に対する崇敬に対する問題視である。その際、この「誤謬」がどこから生じるかについてヴァリニャーノは次の「三つの原因」を取り上げている。第一に、人間の無知および腐敗。第二に、死者の回想と人間の欲望。第三に悪魔の影響と僧侶らとの悪魔的な契約。以下では、本稿の主題と密接に関連するこの第三原因に焦点を当てて見ていく。

ヴァリニャーノは日本人、あるいは他の異教徒の国々に見られる死者、人間や神々(Dij)に栄誉と崇拜を捧げるという上記の誤謬の第一の原因に関して次のように解釈している。すなわち、デウスが唯一の全世界を創造し、支配している存在であるという認識は、あらゆる人間の心に刻印されているはずである。しかし人間は、悪しき生活の邪悪な風習によって腐敗し、是非を弁える能力を失った。結果として、無知の暗闇に包まれつつ、万物の最高の創造者にささげるべき神的栄誉(honores)と礼拝(cultus)をその被造物に与え始めた⁽²⁰⁾。例として取り上げられているのは、太陽や月をはじめとする自然現象に対する信仰である⁽²¹⁾。または、人間は他の武

術や文学で優れた人間を「カミガミ」として崇拝するようになった⁽²²⁾。そして、第二の原因に強欲な者は榮譽と名誉を獲得するために自らの像などを作らせ、それを崇拝させる習慣もあった。あるいは、異教徒たちは既に他界した自身の両親や息子を回想するために死者の肖像を建立させ、支配下にいる者たちにそれを拝むようにさせるという誤ちも起こしてきた。その結果として、時代が経つに連れ、無知の子孫たちはこれらに神性があると思い込み「カミガミ」として扱ってきたと言われて⁽²³⁾。

続いて、第三の原因に、本論で注目したい悪霊たち (daemones) の悪意と人間の欲望がある。ヴァリニャーノによれば、この悪霊たちは昔から日本人が「Tengu」と呼んでいるという存在に相当するのである⁽²⁴⁾。この悪霊たちは人間を憎み、常に彼らを誑かすために、先述の人間によって建立された彫像や肖像の中に隠れ、彼らとやり取りをし、像を移動させる。このように、悪霊たちはそこに神的存在 (divinitas) が宿っていると思い込ませ、悪霊たちが神託 (oraculum) や助言 (consilium) を与え、不思議 (miraculum) までもを働くという⁽²⁵⁾。結果として、人間は自分が建てた像に神的榮譽を与えるようになる。つまり、悪霊たちは人間の無知を利用し、偶像崇拝という誤った行いを強固なものにしてきた。さらに、注目に値するのは日本人による偶像を通じた悪霊とのやり取りは彼らの内心においてだけではなく、彼らの外においても行われている、ということである。言い換えれば、悪霊たちが介入する際には、偶像とのやり取りは想像上ではなく、実際に行われているのである。

ヴァリニャーノはこの悪霊たちによる欺瞞の行為を、日本の僧侶らと次のように関連付けている。

この状況にとらわれたある人間は利益に欲深く、多くをほしがり、神像の祭司 (sacerdotes) ・僧侶 (Bonzos) であることを偽って、作り話・虚偽・妄想をこしらえて、無数の異教徒の民衆をごまかして、自分のために〔信徒たちを〕獲得したのである。祭司たちは風習から種々の礼拝・典礼・儀式・犠牲・生贄を定めた。そして像は神の御意 (Numina) であり、神々 (Deos) であるから、これらに生贄と犠牲 (victimas et hostias) を捧げるべきである、と人々に勧告した。これによって〔神々が〕なだめられ、〔人々〕に救済を与え、生命を保ち、疫病・飢饉・病氣・災禍を遠ざけ、地上の果実が保護され、最後にこの転変し、やが

て亡びゆく生命が、来世において恩恵 (beneficium) と幸福 (felicitas) とをもたらすためである。また祭司たちが神殿 (templum) と祭壇 (ara) を設けるのは、皆からの供物をそこに捧げるためである。これらは祭司自身の用に使い、過度の利益の欲望を満たし、また最大の称賛と栄誉とを祭司たちにもたらす結果になっている⁽²⁶⁾。

つまり、ヴァリニャーノによれば、僧侶らは、その悪霊たちが隠れた像は「神意 (numen)」の徴表であると説きつつ、自らをその「神像」のお使いであると偽って名乗ってきた。さらに、彼らは「祭司」として様々な儀式や典礼を規定した。例えば、この「カミガミ」による祟りを防ぐために供物が必要であると自分の信徒たちに勧告した⁽²⁷⁾。そうすれば、「カミガミ」は災いを遠ざけることになるというのである。同様に、「ホトケ」を崇拝し、その教えに従えば、死後の世界において救済されるとも彼らは主張してきた。これに対して、最終的にこの種々の儀式のために設けられた「神殿」において捧げられた供物は僧侶らの利益と栄誉を満たすためのものになるとヴァリニャーノは批判している⁽²⁸⁾。

さらに、僧侶らは上記の目標を果たすために、彼らを上回る存在の力に頼っている。僧侶らと悪霊たちの関係について次のように言われている。

「このような利益・栄誉を」一層容易に都合よく獲得するために、ある祭司は悪霊たちと契約 (pacto cum daemones) を結び、種々の考案した予言によって、地獄の世界を持ち込んだ者もいた。そこで彼らは、悪魔と結んだ契約の力によって、一定のしるし、輪郭や姿を表出させる。祭司たちの前にいる悪魔たちは、呼びかけられると、人間や家畜の種々の形をまとして姿を現し、祭司たちの命令・指図に従う用意をしている。そして悪魔たちは自分がとった姿の恐ろしさで、他の人々を恐怖させ、また自分たちが呼びかけられた時に示した姿に似た彫像・肖像が建立されるよう勧告する。その結果、以後は悪魔に捧げられたこの種の像が崇拝されるようになった⁽²⁹⁾。

すなわち、僧侶らはさらなる利益と栄誉を獲得するために、意図的に悪霊たちと契約を結び、種々の礼拝や儀式を規定し、この「偽り」の宗教の中心に自分のことを置いた。さらに、この契約の影響で彼らにはこの悪霊たちを召喚する権威を有し

た。すると、悪霊たちは実際に人前で人間や獣の姿を取り、自分の姿を披露する⁽³⁰⁾。悪霊のこのような現れは、ヴァリニャーノによれば日本に見られる仏像の原形であるとされている。注目に値するのは、悪霊たちが僧侶らの指示に従っていることである。このように、僧侶らは単なる悪魔の仲介だけではなく、悪魔的な契約を結んだ結果として悪霊たちを司る力も獲得している。また、信徒たちは信仰よりも恐怖で動かされ、この悪霊たちを拝んでいるということも上の引用から理解されうる。

続いて、悪魔たちが人間を欺くもう一つの方法として、将来についての予言があると言われている。星の動きや自然に関する優れた知識を有した悪霊たちはすべてに関して将来を予言することができると偽って、種々の占いを人間に広めてきた。しかし、これも自分のためにデウスの栄誉を奪おうとする悪霊たちによる単なる空しい迷信的行為であるとヴァリニャーノは批判している⁽³¹⁾。

以上の批判的な論拠を踏まえたうえでヴァリニャーノの結論として理解されるのは、他国と同じように日本にも偶像崇拝や迷信行為が見られる、ということである。ヴァリニャーノはこの行為の源として人間の無知、欲望と悪魔の介入を取り上げているが、この解釈は、トマスによる迷信行為の原因の説明に近似している⁽³²⁾。ヴァリニャーノの論理に即せば、人間の無知による偶像崇拝は本人の意思や能力を超えているとしても、重要な罪であると解釈されている。なぜなら、デウス以外に他の物を拝んではならないという規則があらゆる人間の心に刻まれているからである。さらに、上記において確認したように、当時のキリスト教思想においては、迷信行為は本人の意図を問わず、必然的に悪魔とつながる行為として捉えられていた。しかも、この人間をデウスから離さるべく様々な国々において悪しき生活を広めてきた悪魔は、日本では昔から「天狗」として知られている存在と同一であると言われる。この悪的存在は「ホトケ」や「カミガミ」を導入し、その像や肖像に隠れ、代々日本人を騙してきた。したがって、日本人が行ってきた「ホトケ」や「カミガミ」の崇敬は単なる迷信行為であるだけでなく、悪魔自体の崇拝になる⁽³³⁾。そして、「僧侶」として日本で知られている「祭司たち」はこの機会を狙って、悪魔と契約を結んだとヴァリニャーノは訴えるのである。つまり、僧侶らは悪霊たちの魔力を利用し、信徒たちの恐怖感を操りつつ、自分の利益を増やす「欲望に満ちた祭司」として位置づけられているのである。

おわりに

上記の分析から、次のことが明らかになった。まず、ヴァリニャーノは日本の宗教を見た際に、ヨーロッパをはじめ他国民においても存在する迷信的な行為を見出した。彼の論理に即せば、デウスの存在を知らない日本人は悪魔に騙されつつ、何の神性もない存在を拝んできた。これは無知からなる偶像崇拜に相当し、キリスト教思想からすれば大きな罪であった。なぜなら、先述したように人間の崇敬に相当するのがデウスであるという規則は人間の心に刻まれているからであるという。

本稿の第三章において確認したように、ヴァリニャーノは死者や生命・理性を欠いたもののために像を建て、礼拝や儀式を行うという「誤謬」の原因として、人間の無知や悪魔の介入を取り上げているが、これはトマスが偶像崇拜を解釈した際に列挙した原因と非常に似ていることも既に指摘した。また、ヴァリニャーノは僧侶らを昔から日本人の間に見られる偶像崇拜という誤った習わしから生じた存在として位置付けていることも上記の分析から窺える。この「祭司たち」は、自らの意志で悪霊たちと契約を結び、共同体を組んだと解釈される。そして、この共同体の目的は、デウスに付与されるべき荣誉や礼拝を濫用し、剥奪することであったが、ヴァリニャーノの時代にあっても、僧侶らがこの魔力を利用し、自らの利益を増やしつつあるということが見てとれる。結果として、このような賤しき同盟から成立したのが仏教や神道を含む日本の「邪教」であると言われるのである。

そして、もう一つ言及すべき重要な点として、この悪魔的契約における日本の信徒たちの位置付けが挙げられる。具体的に、ヴァリニャーノによれば、僧侶らは「ホトケ」や「カミガミ」が悪魔であるという真実を知っているものの、内心で実際に信じていない作り話をつくり、無知の信徒たちにこれらを拝めば、この世における災いが避けられ、死後の世において救済されると偽って日本の信徒たちにこれらを崇拜させている。結果として、僧侶らの指示でこれらの悪魔たちを拝む日本人の信徒たちは、救済されるどころか、むしろ地獄に墮とされることになっている。この論理は第二章において分析した暗示的な悪魔的契約の概念に近似している。すなわち、自らの意志によってではなくても、迷信的行為を行う者は必然的に悪魔と契約を結んでいるという思想である。このように、僧侶らと悪魔的契約を結びつけることによって、ヴァリニャーノは「ホトケ」の崇敬におけるあらゆる救済の可能性を

否定していると同時に、日本人が地獄に堕ちる原因を僧侶らに帰しているのである。

本稿では、『カテキズモ』の研究史において、同書に見られる反迷信的思想や悪魔的契約という思想的枠組みがこれまで十分に注目されてこなかったことをふまえ、今回この主題に焦点を当てることによって、ヴァリニャーノが在来宗教を批判した際に用いた神学的論拠の理解とその意図について新しい視点を得た。つまり、『カテキズモ』第一巻第四講に見られる悪魔的契約という概念は神学の思想的な伝統に由来しているものであり、日本へのキリスト教の布教という文脈にあつては在来宗教に対して攻撃的なナラティブとして重要な役割を果たした。すなわち、自分の救済へ道が仏教や神道の教えによって塞がっていることを日本人に気づかせることによって、そこから、その信仰を育んできた共同体の象徴である仏閣や神社の破壊にまで至らせるような役割である。

仏教が勢力を失いつつあつた当時の歴史的な文脈において、この『カテキズモ』に見られるナラティブは、自らの救済を求めてイエズス会士を訪れた日本人の地獄への「恐怖」、救済への「希望」、そして仏教や僧侶への「反感」といった感情を喚起することで、理性的な論証とは異なるかたちで一定の効果をもたらしたと考えられる。一方、悪党との契約を通じて人類を堕落させるという悪魔の役割は、訳語として用いられた天狗には元来なかつたであろう。そのため、日本人にとっては理解しがたい側面もあつたと思われる。それゆえ、『カテキズモ』におけるこのような点がキリシタンにとってどの程度効果的であつたかについては疑問が残るが、この点は今後の課題としたい。

註

- (1) 例として次の研究を参照。桑原直己「A・ヴァリニャーノの適応主義と『日本のカテキズモ』」、鶴岡賀雄編『キリスト教と日本の深層』オリエンツ宗教研究所、2012年、97-114。U. App, *The cult of Emptiness: The Western Discovery of Buddhist Thought and the Invention of Oriental Philosophy*, University Media, 2012, Ch. 5。平岡隆二『南蛮系宇宙論の原典的研究』花書院、2013年、第一章。折井善果「『奇跡』と適応——イエズス会宣教師による『理性』概念の形成と日本」、齋藤晃編『宣教と適応』名古屋大学出版会、2020年、132-161頁。
- (2) メイナードはヴァリニャーノの『カテキズモ』が彼の弟子でもあつたマテオ・リッチ

- の『天主実義』という教理書にどれほど影響を与えたのかについて考察している。氏によれば、リッチはヴァリニャーノの助言に従い、儒学に対しては中国古典に基づいた解釈学的批判を行った。そのようにして『天主実義』に見られる論証は、従来まで在来宗教を偶像崇拜・無神論と見なす『カテキズモ』よりも洗練されており、そして効果的である、と彼は判断している。T. Meynard s. j., “The Overlooked Connection between Ricci’s Tianzhu shiyi and Valignano’s Catechismus Japonensis”, *Japanese Journal of Religious Studies*, 40, 2, 2013, pp. 303-322.
- (3) ムイベルガー・ヨセフ・B.『日本における信仰 ヴァリニャーノの「日本のカテキズモ」と倫理神学的見解』サンパウロ、2001年。
- (4) 海老沢有道『キリシタン教理書』教文館、1993年、105頁。
- (5) 岸本恵美『ミラノ・プレラ国立図書館蔵『日本のカテキズモ』について』『日本語・日本文化』29号、2003年、162頁。
- (6) 以下の *De Doctrina Christiana* の翻訳と () の中にある補足は筆者によるものではあるが、加藤武訳「キリスト教の教え」『アウグスティヌス著作集』6、教文館、1988年も参考にした。原文は以下の通りである。“*Superstitiosum est quidquid institutum est ab hominibus ad facienda et colenda idola pertinens vel ad colendam sicut deum creaturam partemve ullam creaturae vel ad consultationes et pacta quaedam significationum cum daemonibus placita atque foederata, qualia sunt molimina magicarum artium*”. St Augustine. *De Doctrina Christiana*, Oxford Early Christian Texts, R. P. H. Green ed., Liber Secundus, 1996, p. 90.
- (7) アウグスティヌスはこの悪魔的共同体と迷信行為の関係に関して鳥占いのことを取り上げている。鳥占いとは、飛行を観察することによって兆しをつかもうとする占いの一つである。アウグスティヌスにとっては元来その兆し、あるいは徴しに意味があるはずがない。むしろ、共同体の各人の同意からその兆しの意味が生じるという。このような占いにおける記号 (signum) は人間同士ではなく、人間と悪魔の間での同意に基づいていると言われている。同様に、お守りのような占いや治療に利用される道具を通じて、その行為の効果を求める人間が悪の力と接することになる。このように、アウグスティヌスは迷信における行為だけでなく、その際に用いられる記号や物も批判しているのである。アウグスティヌスにおける迷信行為についてのより詳細な研究は、F. A. Campagne, *Homo catholicus. Homo superstitious. El discurso antisupersticioso en la España de los siglos XV a XVIII*, Mino y Dávila, 2002, pp. 58-59 を参照。
- (8) St Augustine, op. cit., p. 98. “*In omnibus ergo istis doctrinis societas daemonum formidanda atque vitanda est, qui nihil cum principe suo diabolo nisi reductum nostrum claudere atque obserare conantur*”.
- (9) Campagne, op. cit., p. 66.
- (10) ibid., p. 69.
- (11) “*Sic ergo dicendum quod si quis utatur somniis ad praecognoscenda futura secundum quod somnia procedunt ex revelatione divina, vel ex causa naturali, intrinseca sive*

extrinseca, quantum se potest virtus talis causae extendere, non erit illicita divinatio. Si autem huiusmodi divinatio causetur ex revelatione daemonum cum quibus pacta habentur expressa, quia ad hoc invocantur, vel tacita, quia huiusmodi divinatio extenditur ad quod se non potest extendere, erit divinatio illicita et superstitiosa.” St. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, T. F. O'M. Foster ed., vol. 40 (2a2ae 92-100), Cambridge University Press, 1968, Qu. 95 art. 6, p. 58.

- (12) “et intendimus esse pactum implicitum in omni observatione superstitiosa cuius effectus non debet a Deo vel a natura rationabiliter exspectari”. Jean Gerson, “De erroribus circa artem magicam”, *Œuvres complètes*, P. Glorieux (ed.), Volume X, Desclée, 1973, p. 79.
- (13) この点に関して E. Peters, *The Magician, the Witch and the Law*, University of Pennsylvania Press, 1978, pp. 144-145 を参照。
- (14) Campagne, op. cit., pp. 71-72.
- (15) 例として S. MacCormack, *Religion in the Andes: Vision and imagination in early colonial Peru*, Princeton University Press, 1991, pp. 40-41 を参照。
- (16) パリ大学でロヨラが受けた教育がイエズス会の教育制度にどのような影響を与えたかについては、G. E. Ganss, *Saint Ignatius' Idea of a Jesuit University*, The Marquette University Press, 1954, Ch. 2 を参照。
- (17) ザビエルの書簡において悪魔論がどれほど反映されているかに関しては、拙稿「聖フランシスコ・デ・ザビエル書簡における僧侶像——好意的な印象から好戦的な態度へ——」『アジア・キリスト教・多元性』「アジア・キリスト教・多元性」研究会、2020 年、第 18 号、13-27 頁を参照。
- (18) 特に日本人における「迷信行為」について詳細に述べているのは初期イエズス会士のコスメ・デ・トレス、あるいはファン・フェルナンデスが記したと思われる『日本の異教徒の生活に見られる誤謬及び信仰している偶像崇拜の諸宗派の要約』（1556 年）である。この書物に見られる神道に対する批判に関しては、J. S. A. Elisonas, “The Jesuits, The Devil, and pollution in Japan. The context of a syllabus of errors”, *Bulletin of Portuguese - Japanese Studies*, 1, 2000, pp. 3-27 が詳しい。
- (19) ヴァリニャーノは次のように、自らの著作を従来の日本布教のために記されたカテキズモの中に位置づけている。「日本においては我々の会士たちが様々なカテキズモを作成したが、そのうちの一つはラテン語で『日本の諸宗派を論駁するキリスト教信仰のカテキズモ (Catechismus Christiana fidei in quo sectae Japonenses Confutatur)』という題名で印刷されている」(折井、前掲書、151 頁より)。また、『カテキズモ』に先行する日本の教理書に関して、フーベルト・チースリク『キリシタンの心』聖母文庫、2010 年、第二章を参照。
- (20) 以下にある『カテキズモ』の翻訳は主に家入の翻訳を参考し、必要に応じて改めた。家入敏光訳編『日本のカテキズモ』天理図書館、1969 年。原典：“*sed quia mortales homines pravis malae vitae moribus corrupti, et in multa flagitiorum genera prolapsi à*

vera rectae rationes lege, et norma aberrarunt. et ita crassis tenebris et ignoracione excaecati cum summum rerum omnium opificem non coluissent, ne dum agnovissent divinos honores, et cultus procreatis à Deo rebus tribuere caeperunt". Alexandro Valignano, *Catechismus Christianae fidei, in quo veritas nostrae religionis ostenditur, et sectae Japonenses confutantur, editus à Patre Alexandro Valignano societatis Iesu...*, Tenri Central Library, 1972, fol. 37v.

- (21) 日本布教活動の早い段階からザビエルによる日本宗教に見られる月と太陽の礼拝への自然科学的な批判が確認しうる。メナチェ、前掲書、14-15 頁。
- (22) "*fuere alij, qui homines divinis honoribus prosequuti sunt, rati in eis aliquid divinitatis inesse, quod ipsos caeteris hominibus multis in rebus antecellere viderent, et ita aliqui sunt habiti, exismatique Dij* [...]" Valignano, op. cit., fol. 37v.
- (23) "*hac sese arte fallebant, et seipsos consolabantur mortuorum imaginibus conspectis, ac si vivorum coram praesentia cerneretur. procedente tempore nepotes, et posterì, quum in magna inscitia, et ignoracione versarentur, arbitrati numen aliquod in simulacris inesse, Deos aliquos esse iudicantur*". ibid., fol. 38.
- (24) "*Tertia causa fuit, summa daemonum malitia, quos Tengu Iaponij vocant, et immodica hominum libido*". ibid. fol. 38. 『カテキズモ』に見られる仏教用語の「天狗」としての「悪魔」という翻訳については米井力也『キリシタンの文学——殉教を促す声——』平凡社、1998 年、72-103 頁を参照。
- (25) "[...] [*Daemones*] *ad homines decipiendos, se se in illas statuas, et simulacra hominum arte, et industria confectas abdebant, et inde responsa rogati dabant, huc, atque illuc imagines loco movebant, et ita loqueando, respondendo, et se se daemones in illis imaginibus movendo significabant hominibus, in illis statuís divinitatem inesse, quae ad interrogata responderet, oracula ederet, consilia praeberet, miracula patraret, loqueretur, incederet*". Valignano, op. cit., fol. 38-38v.
- (26) "*indeque arrepta occasione alij homines quaestus avidi, et cupidi se se sacerdotes talium simulacrorum, et Bonzos finxerunt mille confictis fabulis, mendacijs, et delirijs gentium populus sibi conciliantes. morum varios cultus, ritus, ceremonias, sacrificia, et victimas instituerunt, persuaserunt hominibus, simulacra esse Numina, esse Deos, quibus victimas, et hostias offeri oporteret: ut placarentur, ut salutem concederent, vitam conservarent, ut pestem, famem, morbos, et calamitates arcerent, ut terrae fructus tuerentur, denique ut in hac fluxa, brevique peritura vita beneficia conferrent, et faelicitatem in altera: templa, et aras dicarunt, ut in eis munera offerrentur ab omnibus, quae in suos ipsorum usus coverterentur, et immodicam lucri cupiditatem explerent. atque maximam ipsis laudem, et gloriam conciliarent*". ibid. fol. 38v. 強調は筆者による。
- (27) ムイベルガーは、ヴァリニャーノが『カテキズモ』において仏教と神道を混同していたと判断したうえで、彼の神道理解を批判している。対して、狭間はヴァリニャーノの他の書物や書簡を分析した結果、両方は別の存在であったことを彼が把握していた

ということを主張している。狭間芳樹「ヴァリニャーノの日本宗教理解 ― 第72回学術大会紀要特集」『宗教研究』別冊、87号、2014年、281-282頁。

- (28) この僧侶らに対する経済的な批判が初期イエズス会士の書簡においても確認する。イエズス会士が語る僧侶らの「強欲」の一つの例として、ザビエルが日本を去って間もなく、日本において暫く布教活動をしたペドロ・デ・アルカソヴァの書簡（1554年）がある。そこにおいて、僧侶らが宣教師たちを憎んだ理由は彼らの説教を聞いた日本人が自分の先祖たちが地獄にいることに気がついた結果、僧侶らにお金を渡すことをやめたからであるという。Pedro de Alcaceua, *Carta do Irmão Pedro de Alcaceua, para os Irmãos da Companhia de IESV de Portugal escrita em Goa, no anno de 1554 contra algumas cousas de Iapam, do anno de 52 e 53 que la esteve*, Historical Documents in Foreign Languages Relating to Japan, Selection III (Original Texts), Vol. II, 1996, p. 150.
- (29) *“non defuere alij, qui ut haec faciliùs, et commodiùs assequerentur pacto cum daemonibus inito varia sortium excogitata genera inferarum orbem invexerunt. et ita vi pacti cum daemonibus initi, quum certa signa, circulos, et figuras describunt, se se illis praesentes invocati daemones exhibent varias, vel hominum, vel pecudum, formas induiti, et ad ipsorum iussa, et imperia exequenda parati, et assumptarum figurarum horrore terrentes alios homines, ac persuadentes statuas, et simulacra construi similia ijs figuris, in quibus ipsi invocati comparuerunt. et hinc factum est postea, ut talia simulacra daemonibus dicata colentur”*. Valignano, op. cit., fol. 38v-39. 強調は筆者による。
- (30) 日本に導入された、身体を取るという天使と悪魔の能力に関して、拙稿「イエズス会日本コレジオの『講義要綱』に見られる天使と悪魔像について」『基督教学研究』第43号、京都大学基督教学会、2024年を参照。
- (31) Valignano, op. cit., fol. 39. トマスに同じような解釈が確認できる。彼によると、将来を予言する能力（divinatio）は神にのみ備わっているのである。人間が予知を試みる場合、それは自分たちの力を超える存在、つまり悪霊たちの助けを借りることになる。このような予言行為は、本来デウスだけが有する神的権能を横取りし、それを濫用することに他ならない。そのため、こうした予知は「迷信行為」とされ、神の権能を侵害するものとトマスは捉えている。Aquinas, op. cit., Qu. 95 art. 1, p. 38.
- (32) トマスによれば、迷信行為の源は二つある。一つは人間の行為による迷信行為である。その中に、人間における他の人間に対する愛情（affectus）の表現による偶像崇拜、絵や像を通じた自らの表現による偶像崇拜、デウスの存在に関する無知から生じる被造物（creatura）への崇敬。もう一つは悪霊たちの影響がある。すなわち、悪霊たちは人間を惑わすために偶像（idola）として現れ、彼らとやり取りをしてきたと言われている。ibid. pp. 32-34.
- (33) *“et hinc factum est, ut in Iaponiam daemones Cami, et Fotoque invexerint”*. Valignano, op. cit., fol. 39. つまり、日本の「カミ」と「ホトケ」を引き込んだのは悪魔たちである。